

理性と信仰の調和的融合

——メソジストの視点から見るキリスト教教育と学問——



副院長 大学宗教主任 学院宣教師
シュー士戸 ポール
Paul Tsuchido Shew

宗教と政治は、その最も建設的な形態においては、個人や社会に大きな利益をもたらす可能性を秘めています。しかし、破壊的な形態では、大きなダメージを与える可能性があります。現代社会において、ソーシャルメディア上でのエコーチェンバー現象などを通して、「真理」が主観的解釈へと後退する傾向が高まるにつれ、その二面性はより顕著なものとなっており、今日の世界はさらに分極化する傾向にあります。この現象は、政治の舞台で顕著だけではなく、キリスト教を含む世界の主要な宗教の多くにも広く影響を及ぼしています。25億人を超える多様な信者を抱えているキリスト教は、内部での意見の相違や真理の歪曲と無縁ではありません。現在のデジタル時代において、一部のキリスト教コミュニティにおける真理と理性の歪曲は、特に問題であると考えます。キリスト教学校と

じ、知的成長における理性の重要な役割を強調しました。

またウェスレーは、宗教の領域においても、聖書を解釈し神学的概念を理解するために理性が不可欠であると論じました。聖霊の助けにより、理性が神と聖書に対する理解を深めると考えたからです。さらに、倫理的な判断や、様々な人間関係上の義務を理解し果たす上でも、理性が極めて重要であると考えました。これらの観点から、ウェスレーの神学において、理性は日常生活のためだけでなく、宗教、科学、倫理をより深く理解するための極めて重要な道具であることが分かります。

このことは、「ウェスレーの四辺形」と呼ばれるキリスト教教義解釈の有名な枠組みに反映されています。ウェスレーは神学的考察の基盤を、聖書、伝統、理性、経験とし、中でも聖書を最重要視しましたが、同時にキリスト教信仰を理解する上で不可欠なものとして、伝統や経験とともに理性を取り入れたのが特徴です。このアプローチは、聖書、伝統、経験の複雑さを読み解く鍵が理性にあることを示唆しています。彼の説教やその他の著作は、しばしば神学的な疑問に対する合理的なアプローチを反映しており、ウェスレーにとって理性は、真理への道において理解を深めるための神聖な道具であったことを示しています。

アウグスティヌスの理性の支持

アウグスティヌス（354―430）は神

学者は、キリスト教を真理と理性へと再び導く重要な責任を負っています。これは、単に現代的な感覚に基づくものではなく、歴史的なキリスト教信仰の本質的な信条を取り戻すものなのです。

人間の理性はキリスト教の信仰に不可欠であり、健全な宗教の基礎原理です。歴史的なキリスト教神学者と現代の健全な教会は、理性と信仰を相互に協力し合うものと見なしています。歴史的キリスト教神学は、理性と信仰は敵対するものではなく、味方であると断言しています。さらに言えば、理性は堅固なキリスト教信仰に不可欠な要素です。信仰と理性の調和した関係は、特にキリスト教学校にとって極めて重要です。

メソジストの理性の強調

メソジスト教会と世界的なメソジスト教育運

学者、哲学者であり、ローマ帝国時代、北アフリカにあるヒッポ・レギウスの司教でした。彼の著作は西洋哲学の発展に多大な影響を及ぼし、初期キリスト教の神学者として最も重要な人物の一人と見なされています。415年、彼は『創世記逐語注解』を著し、信仰の問題において理性を用いることの重要性を雄弁に説きました。同書はタイトルから受けるイメージとは異なり、創世記を文字通りの意味で解釈したわけではありませんでした。彼は、科学を宗教的教義に合わせようとするのではなく、理性と自然界の観察を用いて聖書の理解を深める重要性を論じたのです。

アウグスティヌスは、キリスト教信者が信仰の問題に理性を用いない場合に生じる弊害を熟知していました。彼は、特に自然現象など、理性と観察によつて明白に理解できる事柄について、キリスト者が無知な聖書解釈を述べることは「不名誉で危険なこと」であると論じ、自身だけでなくキリスト教信仰の評判を落とすことになると警告しました。そうすることで、キリスト者は聖書に対する信用を失い、その結果、キリスト教の中核的な信仰を失う危険性があるからです。今日見られる科学的理解を否定する傾向にも同じ危険性があると考えられます。

アウグスティヌスの「無謀で無能な聖書の解釈者」に対する警告は、理性による知識の追求は信仰と対立するものではなく、むしろ信仰を補完するために必要なものであることを、時代

動の創始者であるジョン・ウェスレー（1703―1791）は、牧師、神学者、教育者として、人間の知的発達には理性が不可欠であると主張しました。知的理性は神から与えられた才能であり、人間にはその潜在能力を最大限に伸ばし、日常生活の指針として用いる責任があるとウェスレーは考えました。理性は文学や科学など様々な知識分野の進歩に不可欠であると論



を超えて思い出させてくれます。理性と信仰の一体化に関する彼の著作は、知識と理性的探求を重んじる古代キリスト教の伝統を明らかにしています。

今日のキリスト教教育における理性

理性と批判的探求は、キリスト教教育と学問の基礎です。この合理的アプローチは、真理と理解を求めるキリスト教の原則とシームレスに一致します。例えば、神学の学問的研究においては、しばしば歴史批評的手法、言語学的分析や考古学などを用いながら、聖書のテキストを丹念に解釈します。神学や聖書学に対するこのような厳格なアプローチは、理性が信仰の深さや信憑性を低下させるのではなく、むしろ高めるものであることを示しています。

理性は単なる補完的な要素ではなく、キリスト教教育と健全なキリスト教信仰体系の礎石なのです。ウェスレーやアウグスティヌスの教えは、信仰に対する理性的なアプローチが、古代にまでさかのぼるキリスト教の伝統に深く根ざしていることを確認しています。宗教的教義は理性と批判的探求の証明力によつて、強さと信頼性を増すことは明らかです。理性の統合は、信仰を減退させるどころか、より堅固な土台を構築し、知的厳密性と敬虔な信仰の両方を持つてイエス・キリストの福音に関わることを可能にしてくれます。この信仰と理性の調和のとれた融合は、現代世界において強固で弾力的なキリスト教の視点を育むために不可欠なのです。